

翁茸の日記帳(20)より

— 罹災の中で受けた親切心 —

古川 久彦

小学校3年生の時の担任の先生は女の先生でした。いつもピンク色の着物に紺色の袴を着けていて、先生が机の横を通るとほのかにナフタリンの匂いがした事を覚えています。

ある日の朝の事です。授業が始まる前に、先生は静かな声でこう話してくれました。「眼が見えない人が居たら、手を引いてあげなさい。足が悪い人が居たら、肩を貸してあげなさい。人に親切にしておくと、あなたが困ったときには誰かがあなたを助けてくれます。」と。

実は過日の東日本大震災のとばっちりを受けて、電車が不通になり止むなく避難所へ送り込まれた時のことです。かれこれ75年も前に教えて貰った先生のこの言葉を想い出して、しばし感傷に浸ったものでした。

丁度その時でした。電車が佐貫駅(常磐線)に入ってドアが開いた途端に、東日本大震災の大地震に出会ったのです。乗客は電車から降ろされて駅前広場で待機していましたが、結局は電車が不通になり全員が避難所へ移動することになりました。避難所までは翁爺の足で約40分は掛かると聞いていました。そして、市街地とはいえども停電で街中は真っ暗です。車ひとつ通っていません。そのうえ初めての土地でどちらへ向かって歩いてよいのか分かりません。ただ只管に先を歩いている人たちの後を追って、腰の痛みをこら

えながら杖を頼りにトボトボと歩いていました。10分も経った頃でしょうか、前を歩いていた人たちはどんどん先へ行ってしまうて人影も見えなくなりました。とうとう一人ぼっちになってしまったのです。寂しくて心細くなりましたが、何をおいても避難所へ辿り着くほかはありません。気を取り直して歩こうと思っている所へ、後ろから静かな声が掛かりました。

彼は東京から来た青年で「僕もこれから避難所へ行きます。お見受けしたところご苦労をされているようですので、僕がご一緒します」と温かい言葉を掛けてくれたのです。翁爺は丁寧にお礼を言って彼に助けられながら歩き始めましたが、所詮八十路を越した老人の身、とうとう歩けなくなってその場に座り込んでしまいました。

青年は心配して、車を探して来ますと言って車道へ出ましたが、折りも折り停まってくれる車などありません。その時でした。この様子を見ていた交通整理をしていたお巡りさんが、翁爺の許へ近づいてきました。そして、「ご主人！ その身体で避難所まで歩くのは無理です。私が送りますから負んぶして下さい。」と言うのです。翁爺は、「それまでして頂いては申し訳ない。」と言って遠慮しましたが、お巡りさんは翁爺の前に腰を低くして「さあー、どうぞ！ どうぞ！」と言って促してくれるのです。あまりの勧めに翁爺は

遠慮しながらお巡りさんの背に負んぶしたのです。いくら痩せているとはいえ体重 50 数 kg はあります。見るからに頑丈な体格のお巡りさんでしたが、途中喘ぎながらのお巡りさんの息遣いに、感謝の涙を抑えることが出来ませんでした。こうして、東京から来た青年と我が身を呈して助けてくれたお巡りさんのお陰で、翁爺は無事避難所へ着くことが出来たのです。

翌朝は電車が不通でしたので、やむなく路線バスで帰ることにしました。バスは駅前から出るというので、ゆっくり歩きながら駅前に着きました。でも、どこにバス停があるのか分かりません。直ぐ前にあった売店のおばさんに尋ねますと、忙しそうにしていた手を休めて丁寧に説明してくれました。でも、翁爺は難聴のためにおばさんの説明をはっきり聞き取る事ができません。それを察したおばさんが言いました。「お客さん！ 私が今か

らご案内しますから、ちょっとお待ち下さい。」と言いながら立ち上がり、店を閉じて鍵をかけ外に出て来てくれたのです。そして、足許の不自由な翁爺の手をとりながらバス停まで連れて来てくれたのです。お陰で翁爺は、今にも発車しようとしていたバスに乗ることが出来ました。旅先の見知らぬ老人のために、店を閉じてまでして尽くしてくれたこの親切さに、翁爺は感謝のあまり直ぐにはお礼の言葉が出ませんでした。そして、おばさんの手をしっかりと握りしめて涙を抑えていました。

かつて無かった大震災という災難時の中で、これ程までに親切を尽くしてくれた青年とお巡りさん、そして駅売店のおばさんに、翁爺は心からの感謝の気持ちを捧げたいと思いこの文を書きました。有難うございました。

(2011. 04. 28 稿)

※「行事報告」の続き



第 69 回 観察会 集合写真 2013 年 10 月 12 日 於：市原市民の森